

氏名	江小涛
学位の種類	博士（経営学）
学位記番号	甲第7号
学位授与年月日	平成30年3月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	日本経済活性化に向けた在日外国人起業家の育成と起業戦略—外国人起業家の視点から—
論文審査委員	主査 高柳 秀史 教授 副査 樋口 徹 教授 今井 秀之 特任教授 矢作 恒雄 特任教授 篠原 一壽 名誉教授

論文の内容の要旨

今回提出された論文（以下本論文と呼ぶ）は、江小涛氏が自らの起業体験に基づき、外国人起業家育成の方法を研究したものである。そこでは、単なる実務家の回顧録に留まることなく、統計的な手法を駆使することにより科学的説得力を持たせることに十分配慮したものととなっている。

本論文は、序論および4つの章から構成されている：

序論 問題意識と研究の背景、研究方法

1章 国家経済と起業活動

2章 実証研究：在日外国人起業可能性調査と分析

3章 外国人による起業状況

4章 提言

加えて、巻末には調査資料が添付されている。

序論では、本研究の問題意識および動機が記述されている。出発点は、自らの起業体験中に日本が他国に先んじ少子高齢化社会に突入し、このままでは経済大国の地位を失うのは時間の問題という実態を見たことである。さらに、日本特有の環境が災いし、日本の大学卒業生達は起業どころかますます大企業への就職という安定志向になり、起業活動率は過去20年近く、常に世界のワースト3という惨憺たる状況である。そこで、自分の体験を生かし、外国人起業家を発掘し育成することで、日本経済の活性化に貢献したいとの思いが、本研究に繋がったわけである。また、「外国人起業家を増やすことが、日本経済という巨大な仕組みにプラスの影響を与える」との信念に基づき、それは必ずや科学的根拠を持って示すことができるという意味を示している。

第1章では、起業に関する世界的な学会であるGEMの研究結果の総括からはじめている。その上で、GEMが蓄積している起業活動率と自らが作成した各国のGDPデータを用い、属する経済圏3グループ毎に、最低9個の重回帰モデルを設計し、その中から最適なモデルを選別、6個の仮説を導いている。結果として、全ての仮説がGDPと起業活動率に有意な関係があることを得

ている。これは、2 章以降で行う在日外国人の起業家の調査分析や、外国人起業家を増やすことが日本の経済への貢献になるという目標には、科学的な根拠があることを示している。

第 2 章では、自らの人脈を用いて在日外国人の起業意図などのアンケート調査を行い、そこで得たデータから、在日外国人の属性(年代や来日前の職業等)毎の起業確率を推定している。ここでは、単にアンケート調査で集めたデータをクロス集計するだけで結論を得るのではなく、プロビットモデルを用いて属性ごとの起業確率を算出している。その結果から導かれる仮説は、十分に合理的であり、これを利用すれば、在日外国人起業家を育成するための、より効率的・効果的提案に結びつくという結論を得ている。

第 3 章では、日本を含む世界主要国の外国人起業家育成の実態を整理している。日本のシンクタンクや GEM の研究結果を参考にしつつも、単なる現状報告に留まらず、外国人が実際に起業する際に参考となるような具体的な情報が記述されている。

第 4 章は、これまでの研究成果を受け、日本の起業環境、外国人起業家を増やす仕組み、在日外国人に分けて、それぞれ現実的かつ科学的根拠に基づく提言を行っている。

審査結果の要旨

江小涛氏が提出した学位請求論文について、予備審査委員会を組織し予備審査を行い、その結果を受けて、審査委員会を組織し審査するに至った。審査は、審査委員による個別の査読の後、口頭試問によって行われた。

江氏は、作新学院大学博士後期課程単位取得退学と同時に現在の指導教授のもとを訪れ、競争戦略論、統計的方法論、科学哲学、IoT 分野技術論等の研究遂行に必要な基礎知識を学んだ。一方、本論文のテーマである外国人起業家でもある。その間、関連論文2点を論集・学会誌に発表し、同時に実務家として自らの起業と事業運営に関する事例2編も完成している。

本論文では、自らの起業体験を、単なる実務家の回顧録に留まることなく、科学的根拠を持って研究している。具体的には、第1章におけるGEMが蓄積している起業活動率と各国のGDPデータを用いた仮説検定や、第2章におけるアンケート調査で集めたデータからの起業確率の算出などである。前者の結論として、国の経済と企業活動率には統計的に有意な関係があり、この研究が科学的に根拠のあることを示している。また、後者では、単に集めたデータをクロス集計するだけで結論を得るのではなく、プロビットモデルにより属性ごとの起業確率を算出している。このように、本論文を通じて、科学的に検証しようと貫かれた姿勢は、その手法とともに高く評価される。

一方、経営学は「実学」であり、机上の空論では通用しない部分がある。本論文は、その意味でも高く評価できる。江氏は、日本では起業家が増えない、成功しない、育たない、といった課題を実体験した。本論文は、起業家として問題意識を持ち、今後外国人起業家が増え、少しでも日本経済活性化の一助となるべく研究を重ねた成果である。とりわけ、日本において起業を考える外国人にとって、多くの示唆を与える論文になっている。今後の研究次第では、日本で起業を目指す外国人の教科書となりうる潜在力を秘めている。

このように、本論文は高く評価できる一方、いくつか改善すべき点もある。まず、形式面では、各所に誤記や脚注番号の間違いがみられる。内容面では、2章と3章の順番は、逆の方が読みやすいのではないかと、また、既存研究をまとめた1節（いわゆる survey）があってもよいのではないかと、などである。

口頭試問では、こうした点について、審査委員からの質疑が展開された。結論として、形式面での問題点は、指導教授の下で十分修正可能であり、内容面での改善すべき点は、今後の研究課題であると判断された。

【審査結果】

本論文は、上記のように詳細部分に立ち入れば、少なからず改善すべき点を抱えてはいるものの、科学的根拠に基づく検証という意識のもと、実学として社会貢献度の高いものであることは大いに評価できる。

以上のことから、審査委員会は、江小涛氏に博士（経営学）の学位を授与することが妥当であると判断した。